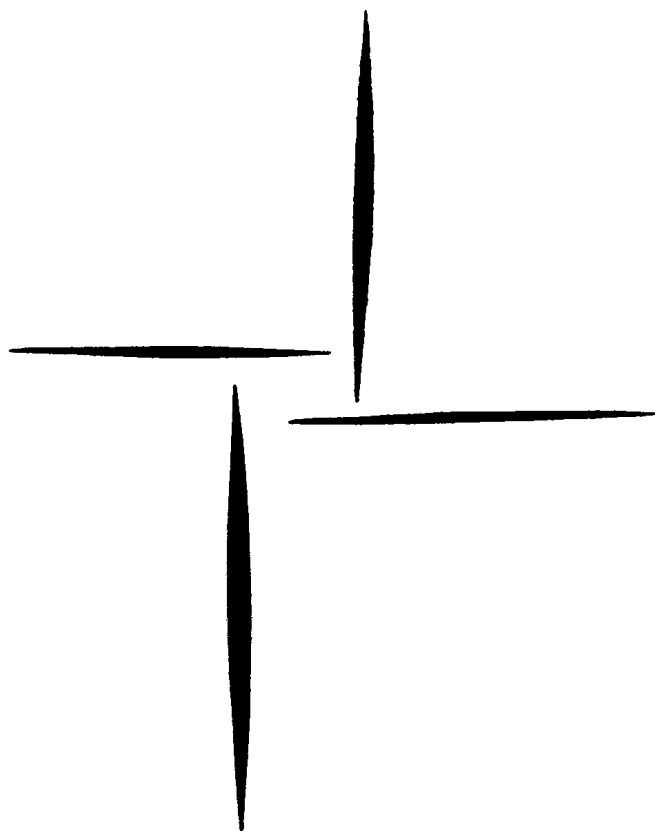




石川啄木

校訂・注釈・解説 岩城之徳



有 精 堂

近代文学注釈大系

石川啄木



昭和四十一年十一月十日 初版発行
昭和四十四年四月十日 再版発行

著者 岩城之徳

発行者 山崎清一

印刷者 鈴木貞三郎

発行所 有精堂出版株式会社

東京都千代田区神田神保町一丁目三十九番地
振替口座 東京四〇六八四番

整版 株式会社井村印刷所
印刷 公和印刷株式会社
製本 誠光社印刷製本株式会社



は し が き

一、本書には石川啄木の文学を代表する作品として、「一握の砂」「悲しき玩具」の二歌集と、詩集「呼子と口笛」、評論「時代閉塞の現状」を収め、これらの作品の形成された時代と、作者の生活と思想を明らかにするため、明治四十四年の啄木日記を収めた。

一、本書の目的は、一般読書人の近代文学の味読、鑑賞に資することはもとより、中学校、高等学校教官各位の教授資料として、また大学、短期大学における国文学の講読、演習の手引として編纂したが、啄木研究の基礎的文獻としての性格も持たせてある。

一、本書の本文は東雲堂書店刊行の「一握の砂」「悲しき玩具」の初版本を底本とし、「呼子と口笛」と明治四十四年啄木日記は、土岐善麿氏と石川正雄氏の御厚意によりその所蔵される原本によった。また「時代閉塞の現状」は、これが最初世に紹介された『啄木遺稿』の本文を底本としている。一、本文の表記は前述の底本に従ったが、漢字は特殊な資料を除いて新字体とし、ふりがなは現代かなづかいに改め、適宜加除した。

一、歌集の頭注は一首毎に作歌日時、初出、重出の文献を明らかにし、その異同を指摘した。また全歌に歌意を付して読解と鑑賞の便宜をはかったが、これについては今後博雅の示教を得て補正して

ゆきたい。

一、頭注は見開き二ページに収めたが、さらに説明を要するものは、補注として巻末に収めた。頭注は本文中番号でこれを示し、「一握の砂」と「悲しき玩具」は作品の配列順に番号を付してこれによった。

一、本書は作品の評釈と鑑賞を主軸にしているが、作家解説と作品解説並びに補注には、従来の伝記研究の成果を充分とりいれて叙述し、またできるかぎり啄木に関する人名や事項を網羅するよう配慮したので、利用次第では啄木小事典の役割を果たすはずである。

一、この稿をなすにあたっては、日本大学助教授水島義治氏、日本大学桜ヶ丘高等学校教諭小久保崇明氏、日本大学三島高等学校教諭藤沢全氏まことしの協力を得た。特に国語学専攻の水島氏と小久保氏に、歌集の注釈について多くの示教を得たことは本書執筆の忘れがたい思い出である。三氏の友情に対し厚くお礼を申し上げます。

一、本書の刊行は恩師吉田精一博士の徳憑によるものであるが、石川啄木生誕八十年の記念すべき年に、多くの人びとの厚意と恩頼にまもられてこの書を世に送ることは、私の深くよろこびとし、かつ感謝するところである。

昭和四十一年十一月三日

岩城之徳

目次

| | |
|------------|-----|
| 歌集 一握の砂 | 一 |
| 歌集 悲しき玩具 | 一四三 |
| 詩集 呼子と口笛 | 一五三 |
| 明治四十四年啄木日記 | 二〇七 |
| 時代閉塞の現状 | 二六五 |
| 補注 | 二七九 |
| 石川啄木の人と生涯 | 三六 |
| 作品解題 | 三三 |
| 石川啄木研究書目 | 三四一 |
| 年譜 | 三五二 |
| 索引 | 三六一 |

歌集
一握の砂

一〔作歌〕明治四十一年六月二十四日午前。初出「明星」申歳七号(41・7・1)「石破集」と題する百十四首中一首。重出「創作」一ノ五(43・7・1)「自選歌」二十三首中。「一握の砂」の歌は初出・重出ともに一行書きであつて、歌集に収録する際三行書きに改められたもの。この歌は啄木の歌として最も広く知られているものであるが、「たはむる」と現在終止の形で歌われているけれども、往(い)にしわが青春を追想する作者の自己愛惜の表白である。東海の小島―おそらく函館大森海岸を念頭においてのものであろう。(歌意)東海の小島の磯の白砂で私は漂泊の悲しみに堪えかねて泣きぬれながら蟹とたわむれたことだ。―思えばあの頃の自分のいとおしく懐しいことよ。↓補注

二〔作歌〕明治四十一年六月二十三日夜十二時より既まで。初出「明星」申歳七号(41・7・1)「一握の砂」というこの歌集の題名はこの歌によつたものである。頬(ほ)―ほほ(ホオ)をホといつたのは音調の上からである。「一握の砂」ASにも「頬の寒き」とある。のこはず―「のこふ」は「ぬぐふ」の古語。「ず」は打消の助動詞「ず」の連用中止形。示しし人―示した人。下の「し」は過去の助動詞「き」の連体形。(歌意)ホロホロと頬を伝わり落ちる涙を拭(ぬぐ)おうともせずに、ただ一握りの砂を私に示した人が忘れられない。

三〔作歌〕明治四十一年七月十八日。初出「明星」申歳八号(41・8・1)「新詩社詠草其四」四十首中の一。誇張的表面の中に、激しく切ない作者の傷心と焦燥がうかがわれる。泣きなむとす―「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形。ここは強意的用法。「む」は意志の助動詞「む」の終止形。(歌意)広々とした海原に向つて、ただ一人で七、八日間も泣こうとして家を出たことだつた。

四初出「スバル」一ノ五(42・5・1)「莫復問(またとふことなかれ)」六十九首中の一。い

我を愛する歌

1 東海とうかいの小島こじまの磯いその白砂しろすなに

われ泣なきぬれて

蟹かにとたはむる

2 頬ほにつたふ

なみだのこはず

一握いちをの砂すなを示しめしし人ひとを忘わすれず

3 大海だいかいにむかひて一人ひとり

七八日ななやつか

泣なきなむとすと家いえを出いでにき

たくーはなはだしく、非常に。ク活用形容詞「いたし」の連用形。主として動詞を修飾する。掘りてありしに「し」は過去の助動詞「き」の連体形。下に「時」を補う。「に」は格助詞。「歌意」ひどく錆びたピストルが出てきた。砂山の砂を指で掘っていた時に。

五〔作歌〕明治四十一年十一月十九日。初出「スバル」一ノ五(42・5・1)ひと夜さに「初出」二夜さに「一晚に」三は接尾語。ここは音調を整えている。嵐来りて「嵐が来て。(来)きたる」は訓詁語。築きたる「築いた。(たる)は完了の助動詞「たり」の連体形で、下の「砂山」にかかる。「砂山」は初出には「砂丘」とある。)何の墓ぞも「いったい何の墓だ!」「ぞも」は断定指示する意の係助詞「ぞ」に詠嘆の助詞「も」がついて一つの詠嘆の終助詞となったもの。「一握の砂」430に「誰のためぞも」とある。「歌意」一晩のうちに、嵐が来て築いたこの砂山は、いったい何の墓なのだろうかなあ。

六「一握の砂」に初出。初恋の胸の痛みを、悲しくも懐しく思い出して歌ったもの。「初恋のいたみ」とあるので中学時代の堀合節子との恋愛の苦惱を回想したものであろう。腹這ひ「腹這ひ」は「腹這ひ」(複合四段動詞)の連用形で、結句の「おもひ出づる」にかかると「いたみ」傷み。マ行四段「いたむ」の連用名詞形。心痛に堪えないこと。強く悲しむこと。「歌意」砂山の砂に腹這ひになって胸疼(うず)く初恋の悲しみを、遠い日の出来事としてしみじみと思いうかべる日である。

七「一握の砂」に初出。砂山の裾「砂山」を砂丘とすれば砂山の尽きる処の意。あるいは単なる砂山のごとで、裾はその砂山の海水に接する処か。あたり見まはし「人目を憚って語らうとするのである。流木に物言はんとする己れを恥じるのである。」「歌意」砂山の裾に横たわる流木に、あたりを見まわしながら、そつとものを言ってみるのである。

一握の砂

4 いたく錆びしピストル出でぬ

砂山の

砂を指もて掘りてありしに

5 ひと夜さに嵐来りて築きたる

この砂山は

何の墓ぞも

6 砂山の砂に腹這ひ

初恋の

いたみを遠くおもひ出づる日

7 砂山の裾によこたはる流木に

あたり見まはし

物言ひてみる

ハ初出「スバル」二ノ十一(43・11・1)「秋のなかに歌へる」百十首中の一首。かなしきよ一はかなしくも悲しいことよ。「さ」は接尾語で、この場合は形容詞「かなし」の語幹につけて、それを名詞にしている。「よ」は詠嘆の終助詞。二句切れ。「歌意」命のない砂のはかなく悲しいことよ。その砂を握ると指の間よりさらさらと砂が落ちるのである。↓補注

九初出「スバル」二ノ十一(43・11・1)「なみだを吸へる」涙を吸っている。「吸へる」の「る」は完了の助動詞「り」の連体形。重きものにしてあるかな「重いもの」であることよ。「に」は断定の助動詞「なり」の連用形。「し」は強意の副助詞。「がな」は詠嘆の終助詞。「歌意」涙を落すと、しつとりとそれを吸って砂の玉ができた。なんと涙は重いものであることよ。

一〇「一握の砂」に初出。死ぬことをやめて「自殺することをやめて」。「死ぬ」は文語ならば「変活用であるから、こは厳密には「死ぬること」となるべきところ。「歌意」大という字を、百あまりも砂に書いているうちに心もなぐさんで、自殺することをやめて帰って来た。

一一初出「東京毎日新聞」(43・3・23)「薄れゆく日影」五首中。猶「いつも」のようにやはり。起き出でぬ「起きて来ない。「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。かなしき癖ぞ「初出」悲しき癖ぞ「おおいかなぶさってくる生活の圧迫の中に、疲れ果てた身の悲しい癖であろうか。四句切れ。「歌意」目をさましてもやはりすべには起き出さない私のこの癖はどうしようもない悲しい癖なのだ。母よどうか咎めだてするな。

一二(作歌)明治四十一年七月二十三日。初出「明星」申歲八号(41・8・1)重出「創作」一ノ五(43・7・1)「自選歌」二十三首中。重出の際「涙し」が「涎し」と改められている。かなしくもあるか「なんとかなしいことよ。「泣く母の肖顔」をひと塊(くれ)の土に涎して作ったわが戯れが悲しいのである。「が」は詠嘆の助

8 いのちなき砂のかなしさよ

さらさらと

握れば指のあひだより落つ

9 しつとりと

なみだを吸へる砂の玉

なみだは重きものにしあるかな

10 大といふ字を百あまり

砂に書き

死ぬことをやめて帰り来れり

11 目さまして猶起き出でぬ児の癖は

かなしき癖ぞ

母よ咎むな

詞。「歌意」ひとかたまりの土くれに、つばきでもって、泣く母親の似顔を作った。なんと悲しいことであらう。

三（作歌）明治四十一年六月二十五日。啄木はこの日夜二時までに、百四十一首作っているがその中の一詩である。初出は同年七月号の「明星」燈影なき一歌稿ノートには「灯（トモシ）なき」壁のなかより杖つきて出づ―もとより作者の幻想である。「歌意」燈火（あかり）のない部屋に私が居ると、老い給うた父と母が壁の中から杖をついて出てくるような気がする。↓補注

四 作歌・初出共に前歌と同じ。あまり軽きに「あまり軽いのに。「あまり」はラ行四段動詞「あまる」の連用形から転成した副詞。「軽き」は「軽し」の連体形の準体言としての用法。格助詞「に」はこの場合原因・理由を示す。三步あゆまず―一歌稿ノート「三步あるかず」とある。「母を背負ひて」も「三步あゆまず」ももとより虚構である。「歌意」たわむれに母を背負ひて来ると、あまりにも軽いのに驚き、思わず泣けて来て三步と歩くことができない。―何とわが母の老い給うたことよ。↓補注

五 作歌・初出は共に前の歌と同じだが、歌稿ノートには「飄然と家を出でては飄然と帰ったる」と既に五度「初出の「明星」には「飄然と」国を出でては飄然と帰ったること既に五度」とあつて、二句では家と国に異同があり、四句と五句は全く異なっている。四、五句が「帰ったること既に五度」と「帰りし癖よ友はわらへど」とでは作者の詠嘆の質と深さの上ではかなりの開きがあるように思われる。「家」「帰りし癖よ」「友はわらへど」とみればこの歌の抒情の底にあるものは、親しき友にもわかつてもらえぬ己が孤独をいとおしむ心情であらう。「歌意」がらりと家を出ては、またがらりと帰つて私の癖の悲しいことよ。友はこの私の癖を笑うけれど。

一 握の砂

12 ひと塊の土に誕生し

泣く母の肖顔つくりぬ

かなしくもあるか

13 燈影なき室に我あり

父と母

壁のなかより杖つきて出づ

14 たはむれに母を背負ひて

そのあまり軽きに泣きて

三步あゆまず

15 飄然と家を出でては

飄然と帰りし癖よ

友はわらへど

云作歌・初出は共に前歌に同じ。ただし歌稿ノート「故さとの父の咳する度にわれかく咳すると病みてある」初出「ふるさとの父の咳する度にわれかく咳すると病みて聞く床」父の「父が。」は主格助詞。はかなし「もろく頼りない感じに言う形容詞であるが、こは心細くあわれなことを言ったのである。」「歌意」故郷の父が咳をするたびに、このように私も咳が出るのであろうか。病気になる心細く悲しいことであるよ。

一七「一握の砂」に初出。啄木には自嘲的な歌が多いがこれもその一つ。犬の月に吠ゆる「A Dog bays the moon」むなく絶叫する、無益なことをしようとする、いたずらに怒号するの意。シェークスピアの「ジュリアス・シーザ」の第四幕第三場のブルータスのせりふに、「そんなローマ人になるくらいなら、むしろ犬になつて月に吠えたほうがましだ。」という一節がある。「歌意」自分が泣くのをもし少女(おとめ)たちが聞いたならば、きつと病気の犬が、月に向つてむなく絶叫するのに似ていると言うだろう。

一八初出「学生」一〇二(43・6・1)そこはかとなき、然も如何ともしがたき寂寥感である。何処やらむどこであらうか。「いづこ」は「いづこ」の古形。不定称場所代名詞。「やらむ」は、「いやあらむ」の略。係助詞「や」(疑問)に動詞「あら」(ラ変未然形)、推量の助動詞「む」のついたもので此の場合は疑問・推量をあらわす。「歌意」どこであらうか、かすかに鳴く虫の声がするが、その虫の鳴くような心細さを今日もまた私は感じることだ。

一九初出「東京毎日新聞」(43・3・28)「春の美(みぞれ)」「五首の冒頭」重出「学生」創刊号「最低音」十六首中。つかれて眠る「初出」眠りては入(い)る。「歌意」真暗な穴に心が吸われてゆくように。ただただ疲れて私は眠るのである。

16 ふるさとの父の咳する度に斯く

咳の出づるや

病めばはかなし

17 わが泣くを少女等きかば

病犬の

月に吠ゆるに似たりといふらむ

18 何処やらむかすかに虫のなくごとき

こころ細さを

今日もおぼゆる

19 いと暗き

穴に心を吸はれゆくごとく思ひて

つかれて眠る

三 初出「東京朝日新聞」(43・3・28)「曇れる日の歌(伴)」の五首中の一首。昭和二十六年十一月三日小樽公園の入口に建てられた啄木の歌碑にこの歌が刻まれている。「歌意」どうか気持ちよく働くことのできる仕事があればよ。それをしとげて私は死のうと思う。

三 初出「創作」一ノ三(43・5・1)明治四十二年三月より朝日新聞社に勤務、同年六月十六日、函館より上京した家族を迎えて、本郷区弓町二ノ十八新井方二階二間を借り、そこから京橋の朝日新聞社に通っていたが、その頃の帰宅時の感想であろう。我のいとしさ―自分のみじめでかわいそうなことよ。「歌意」こみ合っている電車の隅に、ゆうべごとに小さくちぢこまって帰る自分のなんといとおしいことよ。

三 初出、「東京朝日新聞」(43・3・18)浅草の―上京後創作生活に失敗して窮迫の毎日を送っていた頃の啄木にとって、浅草は唯一の憩の場所であった。彼はしばしば六区に出かけて憂悶の心を慰め、また夜の千束町を彷徨して、強い刺激を求めていらだつ心を十二階下の女の肌にもぎらしていたが、この一首はそうした刹那の草葉を求めたあととわびしさを歌ったものであるうか。「歌意」浅草の夜の賑やかさの中に、まぎれ入っては、またまぎれて出て来たあとと、さびしくも空しいわが心よ。↓補注

三 初出「スバル」一ノ五(42・5・1)ただし三句以下は「要するに物に倦みたる心なるらむ」啄木は犬を飼って居なかつたから、もとより空想の歌であるが、明治四十二年の四月、五月と言えば前月より朝日新聞社に出ているとは言え、しきりに上京を促し来る家族を迎えることがかなわず、加えるに文学思想上の煩悶もあって、自虐的・虚無的な生活を送って居た頃である。あはれ―ああ。感動詞。「歌意」愛犬の耳を斬ってみた。ああ、これも何をすることもあきてしまったわが心のなせるわざであろうか。

20 こころよく

我にはたらく仕事あれ

それを仕遂げて死なむと思ふ

21 こみ合へる電車の隅に

ちぢこまる

ゆうべゆうべの我のいとしさ

22 浅草の夜のにぎはひに

まぎれ入り

まぎれ出で来しさびしき心

23 愛犬の耳斬りてみぬ

あはれこれも

物に倦みたる心にかあらむ

〔三〕〔作歌〕明治四十一年十一月十九日。初出
「歌島」三ノ二(42・5・1)重出「スバル」一
ノ五(42・5・1)ユイモアの底にある作者の悲
痛の深さが感じられる。能ふかぎりの一でさ
かぎりの。「歌意」鏡を取り出し、できるかぎ
りの色々な顔をしてうつつして見た。悲しみに泣
き飽きた時に。

〔三〕初出「スバル」一ノ五(42・5・1)「なみ
だ涙その火の如き涙もあらひし心戯けたくな
りぬ」泣き飽き、泣き疲れた後、ふと心に訪れ
たゆとりにも似た安らぎの心情を歌ったもの。
なみだなみだ一語の重複による強調表現。
下の「不思議なるかな」の主語。それをもて
涙でもって。「歌意」涙、涙はなんと不思議な
ものであることよ。涙でもって悲しみを洗った
ら、何となくふざけたいような気持になつてし
まった。

〔三〕初出「スバル」一ノ五(42・5・1)「食事中
まるで子供のように、箸でもって茶碗をたた
いていた自分のしぐさに泣き笑いた痛ましさが
胸にひびく歌。箸もて一箸でもって「もて」は
「以ちて」の約で、体言および活用語の連体形、
またはそれに格助詞「を」のついたものについ
て、手段や材料となるものを示したり、動作の
機縁になるものを示す準格助詞的語。ここは手
段を示す。敲きでありき一初出は一叩きであり
き」〔歌意〕あつげにとられてゐる母の言葉に、
ふと気がついてみると、茶碗を箸でたたいて
いたのだつた。

〔三〕〔作歌〕明治四十一年七月二十二日。初出「明
星」申歳八号(41・8・1)重出「創作」一ノ五
(43・7・1)草に臥て一草の上に横になつて。
〔臥〕は人がうつむいているさまにかたどる象形
文字で、うつむく意からひいてふせるの意にな
つたもので「臥(ね)て」と訓むのはやや無理な
ような感じもするが、横になつて休む意とする
べきであろう。「歌意」草に寝ころんでいて全
く無心になつて何も思うことはない。私の額に
糞をして鳥は空で遊んでいる。

24 鏡とり

能ふかぎりのさまさまの顔をしてみぬ
泣き飽きし時

25 なみだなみだ

不思議なるかな

それをもて洗へば心戯けたくなれり

26 呆れたる母の言葉に

気がつけば

茶碗を箸もて敲きでありき

27 草に臥て

おもふことなし

わが額に糞して鳥は空に遊べり

云「作歌」明治四十二年四月十一日。初出「スバル」一ノ五(42・5・1)歌稿ノートには「髭・下向く・癖・憎き・似」が、「ひげ・下むく・くせ・にくき・に」と仮名、「いきどほろし」が「憤ろし」と漢字になっている。いきどほろし―腹立たしい。不満だ。シタ活用。古い形容詞。「歌意」下向きかげんのわが髭(ひげ)の癖がどうも面白くない。この頃憎く思っている男に似ているので。

元 初出「スバル」一ノ五(42・5・1)死に對する憧れを示した幻想的な歌。あはれあはれ―ああ、ああ。感動詞「あはれ」を重ねて感動を更に強調した表現。自ら死ぬる音の―自分から死ぬ時の音が。銃でもって自殺する時の音を森の中から響いてくる銃声によって幻想したのである。〔歌意〕森の奥から銃声が響いてくる。ああ、自分から死ぬ時の銃声はどんなにすばらしいことだろうなあ。

三 (作歌) 明治四十二年一月十四日。初出「スバル」一ノ二(42・2・1)重出「国民新聞」(42・2・7)「スバル」一ノ五(42・5・1)「創作」一ノ五(43・7・1)小半日―およそ半日。小―はおよそ。ほとんどの意を示す接頭語。小日・小一里。この「小半日」は歌稿ノートや初出歌には「小半時」となっている。〔歌意〕大木の幹に耳をあてて、およそ半日間、私は堅い木の皮をむしっていた。

三 初出「スバル」一ノ五(42・5・1)さばかりの事に死ぬるや―そのくらの事で死ぬのか。「さばかり」は「さ(副詞)とばかり(助詞)の複合した副詞で、「わずかそれほど」の意。〔歌意〕そのくらの事で死ぬのか。そのくらのことのできるのか。やめる。やめる。そんなつまらない問答なんか。

28 わが髭の

下向く癖がいきどほろし

このごろ憎き男に似たれば

29 森の奥より銃声聞ゆ

あはれあはれ

自ら死ぬる音のよろしさ

30 大木の幹に耳あて

小半日

堅き皮をばむしりてありき

31 「さばかりの事に死ぬるや」

「さばかりの事に生くるや」

止せ止せ問答

三 初出「東京毎日新聞」(43・4・25)めずらしく平靜な一日、時計の鳴る音までも面白く聞えるというのである。まれにある「初出は「稀にある」。「まれに」は形容動詞ナリ活「稀なり」の連用形。この平なる心には「落ちついて静かな心には。時計の鳴るも」時計の打つ音も。「も」は添加・強調の係助詞。「歌意」まれに生じるこの平靜な心には、時計の打つ音も興味深く聞えることだ。

三「一握の砂」に初出。急に言い知れぬ恐怖の念に襲われ、それをじつとこらえて、そつと臍(へそ)を撫でてみたというのである。余裕を示そうとした三、四句のユーモラスな表現が如何にも啄木らしい。やがて「そのまま。臍(へそ)をまさぐる」「へそをなでることだ。「ほそ」は「ほぞ」で、「へそ」のこと。「まさぐる」は、手でいじる。もてあそぶ意の「行四段動詞。「ほぞを固む」とか「ほぞを盛(か)む」などという句はあるが、「ほぞをまさぐる」の句はないから、気を静めるためにも「へそ」のあたりをまさぐったというのであろう。「歌意」ふと深い恐怖を感じ、じつとそれをこらえて、そのまま静かにへそのあたりをなでまわしたことだ。

三 初出「東京毎日新聞」(43・5・13)「何がなし」と題する五首中の一首。山の頂上に登り、眼下の眺望に豁然と心開くるの思いがして、思わず歓声を放ち、帽子を振りながら走り下った若き日の感激の追懐であろう。なにがなしには「なにかなし」は「なにへ何Vかなし人無V」の転で、「とにかく」という意味の場合もある。「歌意」高い山の頂上に登って嬉しさのあまり、なんということなしに、帽子を振って下り来たことがあったなあ。

三 初出「一握の砂」何処やらにどこかで。どこかはっきりわからない所で。闇引くごとし。意図を引いていう方法であったものが、のち容易に決定し難い事柄の決定手段に行なわれたものであ

32 まれにある

この平なる心には

時計の鳴るもおもしろく聴く

33 ふと深き怖れを覚え

ぢつとして

やがて静かに臍をまさぐる

34 高山のいただきに登り

なにがなしに帽子をふりて

下り来しかな

35 何処やらに沢山の人があそびて

闇引くごとし

われも引きたし

る。「歌意」とかで多勢の人々が集まって、争ってくじを引いているようだ。自分も何だか引いてみたくなかった。

呉（作歌）明治四十一年七月十六日千駄ヶ谷歌会。初出「明屋」申藏八号（41・8・1）割りて死なまし割りて死にたいものだ。「まし」は現実には存在しないことを仮りに想像し、または期待する時に用いる推量の助動詞。「歌意」怒（おこ）った時は、必ず鉢を一つ割り、それを続けて九百九十九割って死ぬことができたならあ。一ほんとうにそうして死にたいものだ。

毛（作歌）明治四十二年四月十一日。初出「スバル」一ノ五（42・5・1）初出は「いつも逢ふ赤き上衣を着てあるく男のまなごのごろ気になる」稜ある眼一鋭い目つき。「稜は「角」に同じ。古く類聚名義抄にも「稜、カド」とある。ここは鋭い・きついの意。「歌意」いつも逢う電車の中の小がらの男の、鋭いまなごがこの頃気になる。

天初出「東京朝日新聞」(43・3・25)「曇れる日の歌四」五音中の一音。華やかな鏡店の前を通って。そこに並べられてある鏡にふとうつたわが見すばらしい姿に、はっと驚いたのである。前に来てふと一初出は「前にいたりて一歩むものかも一歩していることよ。「かも」は主で奈良時代に用いられた古い詠嘆の終助詞で「一握の砂」に六例ほど見える。「悲しき玩具」にはない。「歌意」鏡屋の前に来て、鏡にうつぼらし姿を見て思わずびつくりした。何と見すばらしそうななりで私は歩いてのことよ。

亮初出「スバル」一ノ五（42・5・1）ただし三四句は「それゆゑ君をいざなひしのみ」気まぐれである。詩人らしい気まぐれというより生活に疲れたものの気まぐれというべきであらう。結句「ゆくところなし」にこめられた寂寥の深さよ。「歌意」なんとなく汽車に乗ってみたいと思っただけのことである。一汽車を降りたが、別に行くところもない。

36 怒る時

かならずひとつ鉢を割り
九百九十九割りて死なまし

37 いつも逢ふ電車の中の小男の

稜ある眼
このごろ気になる

38 鏡屋の前に来て

ふと驚きぬ
見すばらしげに歩むものかも

39 何となく汽車に乗りたく思ひしのみ

汽車を下りしに
ゆくところなし